

今回のテーマは「音色」です。もともとは「ねいろ」と読んでいたのですが、最近「おんしょく」と言われることも多いですね。これが自分の好みに合うかどうかは、ジャズを聴く上でとても大きな要素だと思います。「すごいことをやっているのは分かるんだけど、あのサククスの音（音色）が嫌いなので聴かない」とか、「あの輝かしいトランペットの音がたまらなく好き」というのはよく聞く話ですね。

音色はミュージシャンによって違うと書きましたが、違いがはっきり分かる同じ楽器が入った演奏ならともかく、それ以外は、記憶にある他のミュージシャンの音と比べるので、「何となく違う」と認識されている方の方が多いかもしれません。しかし、音色に注目して音源を聴き比べると、同じサククスでも奏者によって全く違いますし、クラシックとジャズでは大きく違うことなどが改めて分かります。

ヴォーカリストの声質も音色の一つで、楽器以上に好みの分かれるところだと思いますが、声質の違いは、解説の用がないくらい誰でもはっきり分かるので、まず管楽器、今回はその中でもサククスにフォーカスすることにします。

管楽器の中でも、トランペット、サククス、フルート、クラリネットなどは、クラシック、ジャズ両方のジャンルで使われますが、音色という点でいえば、クラシックとジャズで最も違いがあり、かつ奏者ごとの音色の違いも大きいのはサククス（サクソフォン）だと思います。

例えばトランペットだと、クリフォード・ブラウンとリー・モーガンの音色を、何も聴いていない状態で、明確に頭の中で再現できる人は少ないのではないのでしょうか？でも、サククスだと、同じアルトサククスでもポール・デズモンドとフィル・ウッズの音色の違いをイメージできるリスナーは結構いると思われれます。奏法はもちろん、楽器の違い、マウスピース、リードなどのセッティングの違いが音に大きく影響するので、音色の個性が最も出やすい楽器と言えます。楽器の種類もバスからソプラノまで5種類あり、それまで含めるとサククスのサウンドはとても多様性に富んでいます。

◎違う楽器かと思うクラシック・サククスの音色

まず、クラシックのサククス（サクソフォン）奏者の音色を聴いてみてください。上野耕平さんという若手のアルト・サクソフォン奏者の音源です。
<https://www.youtube.com/watch?v=bxwq-RN01bc>

いやー、きれいな音ですね。普段聴き慣れているジャズのサククス奏者の音とは全く違う印象です。どちらが良い音かというより、表現したい音楽に合った音だということになるのでしょうか。このカルメン・ファンタジーという曲をジャズサククスの音で吹いたらやはり合わないと思います。

それにしても、同じサククスという楽器でどうしてここまで違う音になるのでしょうか？まず、求めている音色が違うため、楽器や用具がそもそも違う発展を遂げてきたということがあります。楽器やマウスピースがジャズ用とクラシック用では構造自体も違うことがマハのサイトで説明されています。
https://www.yamaha.com/ja/musical_instrument_guide/saxophone/mechanism/mechanism004.html

奏法もかなり違います。サククスという楽器は、アンブシュアと呼ばれる、マウスピースの啞え方、口周りの筋肉の使い方によっても音色が大きく変わります。大まかに言うと、クラシックでは下唇を下の前歯に巻いて、リードに当てるシングルリップと呼ばれるやり方が多いのに対して、ジャズではファットリップと言って、下唇を巻かずにマウスピース全体をソフトに啞えるやり方をすることが多いです。

シングルリップは常に下唇が歯との間でリードを支えているのでコントロールしやすく、他の楽器との精妙なアンサンブルが必要なクラシックでは主流となっています。これに対して、ファットリップはコントロールが難しいですが、熟練すると、後述するサブトーンを含め色々な音色を吹き分けることができると言われています。

さて、ジャズサククスの音色ですが、まずは自分が一番好きな音色のフィル・ウッズを聴いてください。曲はStolen Momentsです。音のエッジが立っていて抜けが良く、これぞジャズサククスと言いたくなる音色ですね。クラシックにおけるサククスとは全く別の楽器だとも感じます。
<https://www.youtube.com/watch?v=ai3oU-04h7k>

◎ジャズサククス特有の魅力「サブトーン」

ジャズサククスの音色といえば、サブトーンについて触れないわけには行きません。サブトーンとは、リードの鳴りを抑えて、息そのものをマウスピースに多めに吹き込むことで出せる、柔らかくふくよかな音のことです。アルトサククスでも出せますが、より低い音域のテナーサククスの方がより魅力が発揮されると思います。

古いところではコールマン・ホーキンスのサブトーンが魅力的ですね。曲はジェローム・カーンの名バラード、Smoke Gets in Your Eyes。低域でビブラートをかけながら吹くサブトーンが魅力的です。
<https://www.youtube.com/watch?v=WTTDuSevbEct>

サブトーンと言えばスタン・ゲッツを外すわけにはいきません。先日亡くなったボサノバギター、ヴォーカルのジョアン・ジルベルトと作ったアルバムのデサフィナードを聴いてください。ジョアン・ジルベルトの歌が終わった1分55秒辺りからゲッツのソロが始まりますが、この音色も気持ち良いですね。
<https://www.youtube.com/watch?v=So718wk426c>

日本人では、Lydianにもよく出演いただいている鈴木央紹さん(ts)のサブトーンが一番好きです。曲によって、フレーズによって、リードをフルに鳴らすノーマルトーンからほとんど息だけのサブトーンまで自由自在に吹き分けます。音量の大きいテナーサククスを、Lydianのような響きがある空間で思い切り吹くと、鼓膜が過度に振動するような不快感を感じることもありますが、鈴木さんの音は常に心地よいです。
<https://www.youtube.com/watch?v=kid8Q92DPLE>

当然ですが、すべての音域で望み通りの音を出すには大変な訓練が必要で、特に音域によってアンブシュアを変化させなければ良い音が出ないところにサククスの難しさがあります。それがよく分かる、キャノンボール・アダレイの動画があったので見てください。1分10秒付近から、横からのアップになりますが、口の周りを見てみると変化させているのが分かると思います。高音域では唇を強く巻き込み、低音域では口の周りを緩めて、顎を引き気味にしています。
<https://www.youtube.com/watch?v=4iTFfTt0jN4>

◎プロ奏者も良い音を求めて精進

そして、マウスピースの開度やリードの硬軟によって、求める音が出るかどうかとも変わります。Lydianにもよく出演するアルト奏者のAさんは、数年前からセッティングハードに（マウスピースの開度を大きく、リードを硬く）して、最初はとても苦しかったと言いますが、段々楽に吹けるようになってきたと言います。これはアンブシュアのコントロールスキルが上がったということなのでしょう。自分が聴いていても、明らかに音が良くなったと感じます。プロでも、より良い音を求めて日夜努力を続けているわけです。

ということは、良い音を出すにはスキルが必要ということですから、どんな楽器であっても優れたサククス奏者が吹けば、それなりに良い音が出る可能性があるということです。実際、自分は学生時代テナーサククスを吹いていて良い音が出ずに悩んでいましたが、あるプロ奏者に習った時、自分の楽器をそのまま吹いても良い音を出せることに驚いたという経験があります。

チャーリー・パーカーはヘロインを買うのにいつも金がなく、楽器を質に入れてしまい、他人の楽器を借りて吹くこともあったといいますが、それでもいつもパーカーの音色になったという話が伝わっています。とても良く分かる話です。

サククス奏者の音色の違いという点で、興味深い音源がありますので聴いてください。

ご存知の方も多いと思いますが、ソニー・ロリンズのリーダーアルバムの1曲にコルトレーンがシットインした「テナー・マッドネス」です。
<https://www.youtube.com/watch?v=3MkUvZUTFUc>

自分がこれを初めて聴いたのは大学生の頃だったと思います。ロリンズとコルトレーンはそれぞれのアルバムを別々に聴いていて、フレーズの違いはもちろん、音色の違いも聴き分けられているつもりでした。当然、どの部分をどっちが吹いているのか分かってもらうわけですが、しばらくの間どちらか分かりませんでした。

それまでは、コルトレーンは高音域中心の少し硬めの音、ロリンズは低域もつかった太く豪放な音という印象を持っていました。今聴けば、その違いはかなり明確に分かるのですが、当時はかなり似通っていると感じたものです。

16秒あたりからコルトレーンのソロが始まり、2分12秒からロリンズがソロを取ります。7分24秒付近でドラムとの4バースが終わりますが、その後しばらくは今聴いても自信がないくらい似ています。8分32秒あたりからテナー同士の4バースが始まり、そこからははっきりと分かります。なかなか面白いので、耳に自信のある方は是非確かめてください。

以上

Lydianからのお知らせ

10/27(日・昼)は、6月以来久々のレクチャーライブ、今回は「ガーシュイン特集」です。作曲家の技を音楽的にわかりやすく自分が解説し、歌詞の世界を女性ヴォーカリストのRemiさんが解説、その後武藤勇樹さんの素晴らしいピアノ伴奏で歌うという企画です。

ガーシュインは多くの名曲を残し、ミュージシャンの人気が一番高いのではないかと思います。今回もガーシュインが初めて使ったコード進行の”発明”や、ペントニック、ブルーノートをうまく使ったメロディ作りなど、曲がより楽しめるようになるポイントをたくさん解説します。

今年の浅草ジャズコンテストのヴォーカル部門で金賞を取ったRemiさん。歌唱力、帰国子女ならではの発音はもちろん、歌詞や歌われた場面の世界を日本語で説明するのが上手で、毎回自分も、「エッ、この曲の歌詞にそんな意味が含まれていたの?!」と、目から鱗が何枚も落ちるんです。

しかも、その込められている歌詞の意味を、表情でうまく表現してくれるので、歌の世界に感情移入できるんです。「愛しい」はもちろん、「出直して来なさい」「許してね」的な歌詞も表情で表してくれるので、聴き手はその歌に込められている感情に入り込めるんです。どんな曲も同じような笑顔で歌うヴォーカリストとは一線を画しています。

そして、今回のサプライズ! 皆さんご存知の「Rhapsody In Blue」の魅力をたっぷりと、解説編、歌唱編の後でお届けします。

この曲は元々オーケストラ向けですが、2台のピアノで演奏するように編曲された楽譜もあります。これを、1台のピアノ用に編曲して、素晴らしい演奏を聴かせてくれる本田千香さんというピアニストがいらっしゃいます。今回は、本田さんをお願いして、レクチャーライブが終わった後で、約20分のラプソディ・イン・ブルーを聴いていただけることになりました。クラシックと黒人音楽、両方に魅せられたガーシュインの曲を、素晴らしいライブ音響で聴いていただきたいです!

10/27(日)

開店: 12:30 スタート: 13:30 参加料: 3,800円(税込)

曲のレクチャー 中川貴雄(マスター)

歌詞の解説 Remi(vo)

武藤勇樹(p)

1 解説編

- ①S' wonderful
- ②Someone To Watch Over Me
- ③I Loves You Porgy
- ④Our love is here to stay
- ⑤I Got Rhythm
- ⑥Somebody Loves Me

2 演奏（歌唱）編

- ①The Man I Love
- ②But Not For Me
- ③A Foggy Day
- ④Summertime
- ⑤Embraceable You

3 ソロピアノ（本田千香）

Rhapsody In Blue